平成14（2002）年後期：『文化記号論Ⅳ』

※ 池上嘉彦、「言語学と記号論」、in 『講座・記号論１』（川本茂雄 他編）、勁草書房、1982

＊信号と記号
→ コードの存在
＊伝達と意味作用
＊記号体系としての言語
→ 記号の恣意性
→ 言語の線状性
→ 二重分節
→ 翻訳可能性
＊記号論と言語学との関係
→ バルト的包含関係の転換

※ バルト、『モードの体系』（1957-63）、佐藤信夫訳、みすず書房、1972

序論：方法

（第１章）
＊三種類の衣服：イメージとしての衣服、書かれた衣服、現実の衣服
＊三種類のシフター
→ 現実からイメージへ：型紙
→ 現実からことばへ：作り方、仕立て方
→ イメージからことばへ：アナフォリックな表現の使用（この、その）：ゼロ度もあり
＊コーパス：1958年６月-1959年６月のモード雑誌（ *Elle, Jardin des Modes, Vogue,* etc.）
＊ことばの機能
⑴：知覚の不動化
⑵：認識
⑶：強調
＊ラングとパロール：vêtement （衣服）vs habillement（服装、着こなし）

（第２章）
＊入れ換えテスト
ex.「このカーデガンは裏なしならおとなしい感じだし、リバーシブルならおもしろい感じ」
→ 衣服の変異が性格の変異へ：衣服（形態、物質、色）と世界（職業、状態、気分）
ex.「ベスト、背中がすっかりボタン止めになっており、えりは小さなスカーフのよう」
→ 衣服のクラスしかない → 衣服の記述：モード：変異はモードであるかデモデであるか
→ 衣服だけで、モードは明示されないが、暗黙のうちに存在する
＊集合Ａ（衣服～世界）vs 集合Ｂ（衣服～モード）：機能 vs 価値
＊記号：衣服（記号作用部）とモード（記号意味部）との相関関係